
一年間の善

佐原 林

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

一年間の善

【Nコード】

N7251E

【作者名】

佐原 林

【あらすじ】

物凄く影の薄い少女、鈴木沙織はそれが原因で亡くなってしまふ。しかし、目の前に現れた不思議な人のおかげで、一年間善いことをすると言う条件の下、再びこの世に蘇ってきた。そんな一年間のお話です。

第1話〜衝突事故〜

目の前に迫るトラック、それはまるで一種の映画を見てみたいだ。

段々と迫るトラックを呆然と見ながら、私は何故こんな事になったのか考えていた。

ちゃんと信号確認したし、右も左も確認した。だから、私に落ち度はないはず……。だけど、今実際に危ない目に遭っている。

・・・何となく、原因は分かっているけどそれが原因だとは、思いたくなかった。

トラックまで、あと5メートル。

今のうちに逃げれるかと思っただけど、体はそれを否定した。

あと、4メートル、3・・・2・・・1・・・

キキーツ！ドントツ！

一瞬、目の前が光り、そして暗転した。

キヤー。ワー。大変だ！。救急車呼べ。それよりも警察だ。

人々の叫び声が飛び交い、走り回っているのが聞こえる。あまりの騒がしさに、耳をふさぎたいほどだ。

しかし、腕を動かす気力にもなれない。しかも、どこかに力を入れると、今まで体験したことのない痛みが全身を襲う。だから、体を動かさずにじっとしているしか、方法はなかった。

私が事故に遭ってから数分が経った頃、ようやく周りの騒がしさが退いてきた。

ああ、これでゆっくり出来る……。何だが、今日は頭を使いきて、疲れたなあ。一生分を使ったんじゃないあ。

「今日午後3時頃、女子生徒の鈴木沙織さんが、トラックと衝突する事故がありました。沙織さんは、病院に運ばれた後亡くなられ

たそうです。死因は、全身打撲、大量出血、骨折による内臓の損傷などによると見なされています。」

この日、私は死んだ。確かに死んだ。しかし、それにより新たに命を手に入れた。

第2話〜出会い〜

世の中には、影が濃い人や薄い人、様々居る。その中にも、物凄くオーラを出すぐらい濃い人や、反対に目の前に立っていても気づかれないくらい影の薄い人もいる。

私は、断然後者だった。

故意に無視していたとかそういうことではなく、本当に気づかれないのだ。少しは目立とうと、おしゃれをしたり、髪を伸ばしたり、いろいろとやってきたつもりだ。そのおかげで、自分で言うのもあれだが、ルックスは中の上くらいではないかと思う。

それなのに、みんな暫くしてから気づく。中には、1時間ぐらい一緒に行動してからあれつと、気づく人もいる。

しかし、それが自分の死因の一部になるとは思いもよらなかった。

目の前に迫るトラック。その中にとっていた運転手と目があったいや、目があつたと思つたのは私だけかもしれない。運転手は、完全に私に気づいていなかった。

運転手が私に気づいたときには、もう時既に遅し。その数分後には、私はこの世の人ではなくなった。

しかし、皮肉なことにその時だけ私の影が濃くなった。でも、その影ももつじき消えるだろう。もう、この世の人ではないのだから。

・
・
「そんなことないと思うけどな！」

突然、目の前から声がした。私は、不思議に思つて目を開けた。

目の前には、真っ白な世界。病院?と思つたけど、それも違うみたいだ。

恐る恐る体を動かしてみた。また、激痛が全身を襲うかと思つていたけど、それはなかった。

死んでも痛みは残ると思っていたけど、それはないのかも。当たり前前かな、肉体がないから神経もないわけだし……。じゃあ、死んでから痛いとか、苦しいって喋る人って、ただの記憶なのかな。いろいろなことを考えながら、体を動かし立ち上がってみた。すると、難もなく立ち上がることが出来た。数歩歩いてみても、大丈夫そうだ。

やった、やった、久々に歩いた気がする。あれ、でも私幽霊だけど足ってあるんだ。なんか、変な感じ……。

とりあえず、歩けることが出来ると知った私は、久々にふむ地面の感触にはしゃいでいた。

「おいつ。」

急に、後ろの方から声が聞こえてきた。その声は、さっきの声と同じだった。少し、中年じみた、妙に若い張りのある声。

その声のする方へ体を向けてみた。そこには、私より背の高い、おじさんと呼ぶには若すぎて、少年と呼ぶには歳をとった人がいた。その時、初めてこの世界に気づいた。真っ白でもないし、かといって汚れた白でもない、不思議な白の部屋と呼ぶべきだろうか。よく見ると、8畳ぐらいの部屋に机と椅子が置いてある。そして、その椅子の1つにその人は座っていた。

「お前も座れ。それから、お前は一年間善いことをしなければならぬ。これから、その説明をする。」

これが、私の運命との出会いだった。

第3話〜腕時計〜

「・・・あの、もう一度言ってください。」

「お前は、一年間善いことをするんだ。」

椅子に座った私は、質問をしたが返ってきた答えは、変わらなかった。それよりも、私が一年間善いことをするのは、もう決まっているらしい・・・。

「あの、よく話が見えないんですけど・・・。」

「ああ、それはすまなかった。では、手短かに話すでしょう。」

お前も薄々感じているかもしれないが、お前の事故死はお前の影の薄さにある。もちろん、それが全てではない。どっちかというところ、運転手の不注意が主な原因だ。あそこは、信号もなかったしな。しかし、運転手がお前に気づくのが遅すぎたから、この事故が起こったとも言える。その原因が、お前の影の薄さにあるというわけだ。それは、分かっているよな。」

「・・・やっぱり、それが原因でもあるんですか。」

「気づいただろ、運転手がお前に気づかずに通り過ぎようとしたこと。」

可笑しいと思わなかったのか、その影の薄さ。明らかに影薄すぎるだろう。」

「あく、やっぱり尋常じゃなくらい影薄かったんですね、私。何か、自分で言っただけで少し悲しくなってきましたけど。」

「まあ、その原因はお前にないんだ。ズバリ言つと前世が悪い。その影響で、今のお前に災難が降りかかるわけ。で、その災難がその影が薄いと言っわけ。」

「つまり、前世の行いを報いるわけに、一年間善いことをしなければならぬって事ですか？」

「話が早いね。そう言っことでよろしく頼むよ。」

「あ、あのっ!」

そう言つて、席を立とうとするあの人を見て思わず引き留めた。

まだ何にも私は理解していない。理解出来たことは、影が薄いのは前世のせい、それを報いるために、一年間善いことをしなければならぬ、その2つだけ。

「あ、あの・・・まだ、何にも理解出来てないんです。私、死んでいるし、どのくらい善いことをすればも分からないし・・・ほ、他にも！」

次の言葉を言おうとするのを、あの人は手で制した。

「大体分かる。だから少し待て。また、説明するから。」

「あ、はい・・・。」

よく分からないけど、何か威圧を感じてとりあえず黙っていることにした。

数分後、あの人が戻ってきた。

手には、茶色の木箱を持っている。

そして、また私の向に座った。

「わあ、可愛い。これ、腕時計ですか？」

あの人が茶色の木箱を開けると、中から、赤茶の皮をした小さな腕時計みたいな物が出てきた。シンプルな作りで、私の好みのタイプだ。

ただ、腕時計なら本来あるべき文字盤が、その時計から抜けているのだ。ガラス部分は、不思議な水晶みたいな物がはまっている。

「これは、一種のメーターみたいな物だな。」

「メーター？」

「そう、メーター。お前が、どれくらい善いことをしたか、数値によって表すんだ。他にも、ちゃんと腕時計の役割も果たすし、カレンダーみたいにもなってくれる。そうしなきゃ、お前がいつからやっただか、分からなくなるだろ。」

そう説明しながら、あの人は私に腕時計をはめた。

初めて着けるけど、妙にしっくり来て、ずっと前から着けていた

気になってくる。

「お前が、見たい物を想像してみる。成れる範囲なら、何でも成れるはずだ。」

そう言われて、とりあえず今の時間を見たいと考えてみた。すると、何にも無かったはずの文字盤に、三種類の針と、1から12の数字が現れた。

それじゃあ、次は今日の日付。

すると、文字盤に大きく数字が現れた。上の方には、小さめに数字が書いてある。これは、月なのだろう。それなら、大きい数字が日にちという訳か。

それじゃあ、一週間前の日付。

すると、数字がグルッと回った。そして、あるところでピタッと止まった。

「すごい、すごいよこれ。」

「そうか、もう使いこなせるか。それから、もう一つお前にプレゼントだ。」

そう言うと、私の頭の上に手のひらを置いた。

途端に、頭に物凄い衝撃が来た。視界がグラグラと揺れ、頭もグラグラする。どちらのせいなのか、それとも両方のせいなのか分からないが、物凄く具合悪くなってきた。もう、立ってられない。

あの人を手を離れたときは、私が倒れたときだった。

目の前が真っ暗になり、次に目を開けたときは、病院の中だった。

第4話〜目覚め〜

えっ、病院？さっきのは夢？

目が覚めたとき、目に飛び込んできたのは、白い天井、白い蛍光灯、白いカーテン。白で統一された世界だけど、明らかにさっきまでの世界とは違う。

体を起こしてみても、けがをした様子は微塵もない。

もしかして、私が死んだのは夢だったのかな・・・？

そんなことを思いながら、私はベットから降りて、カーテンを開ける。そこには、懐かしき先生がいた。私が通っていた学校の、保健の先生。

夢じゃない、夢じゃないよね。だって、だって。地面もあるし、色もあるし、音もあるし。それに、つねったら痛い。

それでも、心の片隅には嘘かもしれない。夢かもしれないと言う、疑いの心がある。それを確かめるために、恐る恐る保健の先生に近づいてみた。

「あの、ここって保健室ですよ・・・。」

「あら、やっと気が付いた？全く、体調が悪いなら無理しなくてもいいのに。体育の時に倒れたんだよ。」

「えっ・・・。倒れてた？」

保険の先生から聞かされること全てが初耳である。

体育をしていたこととか、倒れてたこととか、全てに覚えがない。

「そうよ。体育の帰りだったんだけどね。ここまで運んでくれた友達に感謝しなきゃね、沙季ちゃん。」

「えっ・・・。」

頭の中では、あることがずっと回っていた。

沙季ちゃん、沙季ちゃん、沙季ちゃん。

違う、私は沙織。沙季じゃない。もしかして、誰かと間違えているの？

「先生、私「せんせー！沙季、目覚めましたか？」じゃない・・・」
私が喋ろうとした矢先、タイミング良く生徒が入ってきた。しかも、沙季という名を呼んで。

「あら、つぐみちゃん。丁度良かったわね。立った今日覚めたところよ。」

「やった〜、帰りの会が終わったから、速効で飛んできたんだよ。」
そう言っつて、私に近づいてきたのは谷原つぐみだった。

私の同級生。前のイメージは、暗い子だったのに、今は明るい。
もしかして、ただの勘違いだったのかな？

「やった〜。さ、早く帰ろう。今日は、一緒に勉強する約束だもんね。」

つぐみは、私の手を取った。そこで、私の目にある物が入った。

それは、あの皮の腕時計。私の思い至大で何にでも成れる、あの腕時計。それが目に入った途端、この不思議な現象が何故起こったのか、おおよそ想像がついた。

今日、7月21日から、私の一年間だけの命が動き出す。

第5話〜設定〜

「ちよつ、ちよつと待って。私、荷物持っていないから。」
意気揚々と玄関へ向かうつぐみを見て、私は慌てていった。

つぐみは、私の方を見て戯けたように笑った。

「ごめ〜ん。荷物のことすっかり忘れてた〜。持ってくるの、手伝ってこようか？」

その言葉を、私はきっぱりと拒否する。

「えっ、本当に大丈夫？だって、5時間目からずっと倒れていたんだよ？」

「大丈夫、大丈夫。それどころか、ずっと寝ていたから、少しからだ動かしたいんだって。自分の体のことは、自分が一番知っているって言うし、ね。」

もしこれで倒れたなら、今後体のことはつぐみに任せるから、さ。
手を合わせて、軽く頭を下げる。それを見て、少し変に思ったのか、少し眉を寄せている。しかし、すぐにその眉の皺も消えた。

「そこまで言うなら、しょうがないか。絶対、無理しないんだよ。」
一言言って、微笑んだ。その顔を見て、私はほっとした。変に怪しまれずに済んだようだ。

「つぐみ、玄関で待ってて。」

それだけ言うと、早足で教室へ向かう。

さすがにここで走ると、怪しく思われだろう。だから、早足と言っても実際には、そんなに早くしないように心がけた。

教室に着くと、早速腕の時計を見た。

腕時計は、既に形を変えていた。

沢山の言葉かがなんでいた。そこに書かれていたのは、遠山沙季という人物についての設定。今、私となっている人物の設定だ。

遠山沙季は、両親の都合でここに転校。つぐみと趣味が合い、仲良くなる。友達の居なかったつぐみにとっては、欠かせない人物になっている。

常に長い髪を2つに結っていて、得意科目は数学。苦手科目は社会。好物は和食。苦手な物は苦い物。

趣味は読書で、特に推理小説ファン。ホラーも好き・・・

その他にも、細かく書いてあったが、これ以上読むと時間が長くなるので読むのを止めた。

ふと、前に自分が座っていた席を見る。

そこには、花瓶があり、その中に花が供えあった。私の大好きな、百合の花が・・・

懐かしくなり、思わずその席に座ってみる。

変わらない風景、変わらない命。変わったのは、自分だけ・・・。自分は生きているのに、自分の席に花が供えられているのは、不思議な心地だった。

いじめとは言わないこれは、なんと表現するべきなのか？

そろそろ席を立とうと思ひ、椅子を引く。しかし、力が強すぎたため後ろの席にぶつかってしまった。

ガコンッ。と言う音に、続けて机の中から何かが落ちてきた。

それは、一冊の本だった。表紙に探偵の絵が描かれていて、題名の脇に漢数字で三と書かれていた。きっと、何かのシリーズ物なのだろう。

その本を戻そうとしたときに、ふと気になったことがあった。

私の後ろの席、誰だった？

記憶を呼び起こし、思い出した。私の後ろの席はつぐみの席だったのだ。

その時、私の設定で読んだ言葉が浮かんだ。

「つぐみと趣味が合う」「趣味は読書。推理小説ファン。」

そうか、つぐみも推理小説ファンなんだ。

机の中に戻そうとしたけど、その本が気になった。
私も、推理小説ファンっていう設定になっているし、読んでみて
も良いかも、と思ったのである。

第6話 机の中

その本を持ったまま、ちらつと黒板の脇に掛けられている時計を見た。

短針は4を少し行った辺りを指していて、長針は15を指していた。4時15分。教室に入ってから、1分経った辺りだろうか。

「さすがに、5分も掛かったら心配するよね……」
本の表紙を開きながら、自分に言い聞かせるように独り言を呟く。2分なら、大丈夫だよな。

「沙季？何しているの？」

つぐみの声がして、気が付いた。ふと時計を見ると4時30分。15分間も読みふけていたことになる。

「ごめつ。この本がおもしろくて、つい。」
慌てて本を机の中に戻す。しかし、つぐみは本の存在に気づいてしまった。

「沙季……、その本。」

「やばつ、変に思われたかな？どう、言い訳しよう……。」
どう言い訳しようかと、思考を巡らせながらつぐみの方を見る。つぐみは、瞬きもせずに私をじつと見つめている。

「その本、おもしろいよね。」
次の瞬間、にこりと笑って出た言葉に、思わず聞き返しそうになる。予想外の言葉だった。

「ん、ああ、うん。おもしろくて、つい読みふけっちゃった。」
「やっぱり、良いよねその本。特に、探偵の水原さんがさあこう。普段はクールなのに事件のことになると熱くなって。しかも、推理中は目をキラキラさせて。そのギャップが良いと言うか。しかも、テンポの良いストーリー展開。読んだら、止まらないって言葉、この本にピッタリだよ。」

息をつく暇や、相づちを打たせる暇を与えないかのように、この本について語っていた。本当に、この本が好きなんだと分かる。目をキラキラさせて語る彼女を見ると、きつと探偵の水原も推理中はこんな顔をしているんだなと、想像出来た。

そして、彼女の輝く笑顔は可愛かった。暗い人というイメージは間違っていたようだ。

「さ、帰ろうよ。早く帰らなきゃ、勉強する時間が無くなるよ。」
「うん。」

つぐみに本を渡して、教室を出た。教室を出るときに、ちらっと後ろを見たら机の上の百合の花が見えた。私が大好きだった百合の花。今も、その花は好き。だけど、沙季はどうなんだろう。

机の上から、百合の花が消えるのはいつ頃なんだろう……。ふと、頭の中をこの言葉が横切った。それは、ひどく寂しく感じた。あの花がこの教室から消える頃。それはきつと、私の存在が本当の意味で消えたことになるのだろう。みんなは前に進まなきゃならない。だけど、私は、私という存在は、もう止まってしまった。前を進んでいくみんなにとって、いつまでも後ろにいる私を振り返ることは、無くなるのだろう。それは、友達はもちろん、先生や家族でさえ、振り返ることは無くなるのだ。

机の上から花が消えたとき、みんなは私のことを振り返らずに、前に向かうのだろう。

「ねえ、何しているの？早く行くよ。」

「……ああ、ごめん。」

つぐみは既に玄関の方にいた。私は、慌てて後を追う。

「そう言えば……」

そういえば、両親はどうしているのだろう？

第6話〜約束〜

本屋に行くと、つぐみは早速推理小説のコーナーに向かっていた。私も、あの本が気になっていたので、つぐみの後ろについて行く。

推理小説のコーナーには、思った以上に小説があった。その中であのシリーズの本は結構な量があったので、人気のシリーズなのだろうと察した。

「あつ、新しい巻が出てる。．．．どうしよう、お金足りるかなあ。」

「足りなかつたら貸してあげるよ?」

「え、何か悪いなあ。」

そう言いながらも、つぐみの中に諦めるという選択肢はなさそうだ。そんなつぐみが、ちよつと微笑ましく感じる。

そう言えば、今の私の所持金って．．．

鞆の中を探ると、折りたたみ式の財布があった。その財布を取り出して、ちよつと啞然とした。

その財布は、以前私が使っていた財布と全く同じ物だった。最近買った物で、奮発したお気に入りの財布。

沙季の中に、沙織を見つけた気がしてちよつとだけ、安心した。

恐る恐る中身を確認すると、千円札一枚と七百十一円。以外と入っていた。

それなら、私もあの本を集めてみよう。

そう思って、私は一巻を手にとった。裏表紙に書いてある値段を見ると、五百十円だった。文庫だからなのか、思った以上に安かった。

「その本、持ってなかつたんだ。」

つぐみが不思議そうに聞くので、私は内心焦った。

もしかして、既に持っている設定だったりするのかな．．．

「ど……どっして？」

「いや、別に。そのシリーズの内容知っているから、持っているものだと思ってたんだ。」

「ああ、そう言うことか……」

「ここでちよつと間をあけて、何て言おうか迷っていた。」

「んーとね……前の友達で集めている人がいて、その人から二巻借りて、読んだことがあるんだ。」

「それで〜。」

「つぐみは納得したようで、心からほつとした。」

「買わなくなつたつて、私が貸してあげても良いのに。」

「好きな本は、自分で集めたいんだよね。」

「そうなんだ。じゃあ、借りた本でもおもしろいと思つたら集めるの？」

「まあ、でもパクられたと思う人もいるから、人によるかもなあ……」

「へえ。」

「ここでつぐみは間をあけた。何か考え込んでいるようだ。」

「じゃあ、私の場合は気にせずにごんどん買ってね。まあ、お金の許す限りで。でね、私も沙季が持っている本で集めたいと思つたら集めるから。」

「つぐみはそれだけ言つと、ちよつと照れくさそうにえへへと笑つた。」

「それを見ていた私は、小指を突き立ててつぐみの前にやった。」

「約束だよ。」

「最初は意味が分からずにつぐみはポカンとしていた。だけど、すぐに理解したのかつぐみも小指を突き立てて、絡ませた。」

「そして、何の合図もないけれど、わたしとつぐみは同時に喋りだした。」

「「ゆびきりげんまん、嘘付いたら〜」」

「また明日」勉強する予定も忘れて、つぐみは去っていった。」

でも私もそうしたと思う。なぜなら、私の手にもつぐみの手にも新しい本があるからだ。

目当ての本が買った日はどこか体全体が違う気がする。つきつきしてわくわくして、帰路につく足が速くなる。

その時まで私は重要なことに気がついてなかった。そのことに気づいたのは、それから15分経ったあたりだ。

家……ど……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7251e/>

一年間の善

2011年11月10日21時08分発行